

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## 江戸時代から明治初期にかけてのゼンマイ生産

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2016-03-08 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 池谷, 和信 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10502/00005920">http://hdl.handle.net/10502/00005920</a>

## 江戸時代から明治初期にかけてのゼンマイ生産

池 谷 和 信

ゼンマイは豪雪地帯の奥山の急傾斜地において高密度に自生し、山菜の中では最も商品価値が高いために山菜の王様と呼ばれる。そして、それが商品化して多量に生産されるようになった時期は、明治後期から大正期(池谷, 1988), 及び高度経済成長期であるといわれる(三井田, 1974)。しかし明治後期以前においても、一部の地域ではゼンマイ生産が行なわれていた。そこで本論では、江戸時代から明治初期にかけてのゼンマイ生産の実態を報告する。

記録を逆上ると、日本海側の奥地山村におけるゼンマイの用途は、住民の自給用保存食の他に、① 平地の農産物との物々交換の品あるいは藩への献上物、そして ② 換金のための品であった。

### I. 物々交換品あるいは献上物としてのゼンマイ

石川県白峰村は、白山山麓で焼畑を営む出作の村として知られる。近世後期から近代にかけて焼畑作り地帯の住民には、牛首乞食と称して冬季間の漂泊生活を送るものが多かった。漂泊先の福井平野の農民は、「正月にやってくる『牛首乞食』とは物々交換をした。牛首からは栃餅、干ゼンマイ、ヒエ、アワ、ソバなどを持ってくる。それと交換に白餅を与えた。」(千葉・三枝, 1983, 傍点筆者)と述べている。これから、干ゼンマイが山に住む人々の交換品の一つになっていることがうかがえる。

ゼンマイが幕府や藩への献上物となっている事例は各地でみられる。越中五箇山では、享保7年(1722)の殿様に献上する品々の書上げの中に干狗背(ゼンマイ)と漬狗背がみられる(石崎, 1972)。これらゼンマイは、加賀藩の広式(台所)や江戸屋敷へ石動

町奉行を通じて納入された。

次に寛政元年刊の「大成武鑑」によると、高田藩では8月に、金沢藩では6月に、忍藩(武州)では寒中に干狗背を将軍に買いでいる(笹川・足立, 1935)。また、長岡藩領の栃尾郷から城内上御台所への御漬蔵、狗背の上納は宝永4年(1707)頃から始められた(栃尾市, 1977)。ところが、天明4年(1784)閏正月に至って、「近年深山迄伐り尽したためか、蔵や狗背が不足となった」と記されている。

越後の守門村では、天正年中の坂戸城役附帳に干狗背が記されている(穴澤, 1961)。このゼンマイは周辺山村から献上されたと思われる。

山形県朝日村倉沢の伊藤伝右衛門家文書「諸御用留帳」には、寛政5年(1793)に、櫛引代官から田沢・本郷両組大庄屋あてに出されたゼンマイ上納の記録がある。また同年の4月には、清暹院様(七代藩主忠寄の長女菅姫)御用で干ゼンマイを江戸まで送るので、5月3日まで納めよという通知が出されている(朝日村, 1980)。このように、当時すでにゼンマイは江戸に送るほど珍重されていた。

これらの事例から、北陸から東北にかけての日本海側の山村においては、生産されたゼンマイが幕府や藩への献上物となっていたことがわかる。

### II. 商品としてのゼンマイ

元禄8年(1695)刊行の「本朝食鑑」には、「ゼンマイは近世食すること流行す」と書かれている(笹川・足立, 1935)。その後、松平定信の老中時代の寛政2年(1790)春、物価引下げのために諸色の直段調べを数次命令したが、乾物では椎茸、ゼンマイ、葛

三品につき「上中下の直段を記し、相分らぬものは一品値段を書出すべし」と命じられた(西村, 1933)。さらに、越後の人が、江戸で越後縮を武士に売る時にサービス品としてゼンマイをお得意先に配っていた。ところが、縮商人に持ち込まれるゼンマイがかなりの量に及んだとみえて、天保5年(1834)に江戸の乾物屋からクレームがついている(磯部, 1983)。

これら3つの事例は、ゼンマイが江戸時代を通じて町人の間でも日常生活に欠かせない品であったことを物語っている。それでは、当時の都市住民である町人に消費されるゼンマイは、どの地方の山村から供給されたのであろうか。

天徳3年(1714)に寺島良安の著わした和漢三才図會をみると、諸国の物産として出羽の秋田から干蕨とともに狗背が出荷されている(笹川・足立, 1935)。また、秋田土崎港におけるゼンマイの移出量は、明治10年は1万2千貫、明治11年は9千貫、明治12年は1万貫となっており(開拓使, 1979)、すでにその当時に約1万貫のゼンマイが土崎港から輸出されているのがわかる。しかしながら、このような大量のゼンマイは正徳3年以来のものなのかどうかは明らかではない。ただ、この秋田のゼンマイがどのように大阪へ運ばれていたかは、秋田半兵衛氏の話からうかがえる(西村, 1933)。

秋田本場のゼンマイは、毎年夏の7、8月頃に出帆する和船に積まれ、9月から11月までの間に大阪に入港、私の所に加藤甚・小野三の三軒で全部荷受けされた。そして、その船は冬の荒海期に向かうので、安治川尻で越年し、船頭等は京都・大阪や諸所の見物に費やしブラブラ遊んで暮らした。翌春2月頃、時候が春めいてくると出帆の準備にかかり、国からの注文品などを買い整えて抜錨するが、取引は至ってのん気なもので、荷物引替えに代金を計算しようとしても船頭は受取らず、帰国の間際に集金に廻ったものであるという。

こうして、秋田のゼンマイが日本海岸の航路を利

用して大阪の間屋へ運ばれたわけである。これは、北前船の活躍によって近世後期から明治前期にかけて、北海道から日本海沿岸地方や瀬戸内・畿内地方にかけての地域は、相互に物資の流通を通じて強く結びつけられていたが(高野, 1979)、ゼンマイはそれら物資の1つであったことを示す。それゆえ、商品としてのゼンマイを供給する奥地山村が、秋田県内に分布していたことは確かである。

このほかに商品としてのゼンマイは、次の4ヶ所でも生産されたという記録がある。米沢藩の中津川では、文政5年(1822)の「産業御改帳」から、菅笠、菅ござ、繭、タバコ、椀木地、キノコ、ゼンマイなど様々な商品を生産していたことがわかる。中でもゼンマイは、318貫匁の正産量で87貫890文を稼ぎ、小屋、広川原、遅谷、川内戸集落で多く生産された(中津川村, 1960)。

新潟県山北町の富樫太郎左エ門家文書「文政5年(1822)大福帳」によれば、当時太郎左エ門は荒川村の庄屋を勤め、富裕で他に金を融資することができたので、近在の貧農への貸金の額が記帳してある。文政5年1ヶ年では、山熊田村に13件の貸付があった(山北村, 1965)。例えば、与右エ門が酒・餅米・蠟燭・金銭を借り、春にゼンマイが借金の返済のために当てられるほど重要な商品であったことがわかる。

同県下田村では、嘉永2年(1849)、与板町の扇屋清助がゼンマイの買占を願い出て許されている。これは下田郷産の干ゼンマイを扇屋が毎年少量づつ大阪へ送っていたところ、その評判が大変よく品質もすぐれていたため、一挙に大量に買入れて大阪へ送ろうとするものであった。藩は早速、谷地村新五左衛門など6人の肝煎を狗背取締係に任命している。各村々では百姓たちが採集してきたものを肝煎がまとめ、それをさらに前記6人のもとへ集めて扇屋へ引渡すことになっていた。扇屋はこの買入総額の一割を冥加金として藩に納めた(下田村, 1971)。例え

ば、下田村大江・大谷では、弘化4年(1847)、肝煎善四郎が部落の人から乾ゼンマイを集めた記録がある(新潟県, 1974)。善四郎は、村人30人から1人当たり6貫700匁で合計すると約200貫の干ゼンマイを集めていることから、1850年頃の下田村内には、ゼンマイ生産の行なわれていた集落が分布していたのがわかる。

福島県只見町田子倉では、(昭和31年に田子倉ダムの建設によって水没した集落)江戸時代以来の換金用の山菜とは、もっぱらゼンマイであった。安政3年(1956)の黒谷村の書上げによると「狗背五箇、目方四百五拾貫目、比金貳拾六兩壹分」(只見町, 1964)とある。田子倉にもゼンマイが他国出しの重要な物産であることを記した文書が残っている。しかし、ワラビやキノコ類は江戸時代には換金用にはならなかったらしく、現金収入となる仕事は、狩猟、漁撈、ゼンマイ採りなどである(渡部, 1981)。

さらに越中五箇山では、藩政時代に火薬原料である煙硝、和紙、繭、生糸、養、その他ゼンマイ等の産物、あるいは石灰等を売却して貨幣を獲得した(小寺, 1934)。例えば、宝暦14年(1764)の書上帳によると、様々な山村産物の中に塩漬狗背、干狗背を記している(高田, 1981)。

こうして、藩政時代から明治初期にかけて、商品としてのゼンマイは奥地山村の生活の中で重要であり、秋田県や新潟県の奥地山村の一部の集落では、かなり大量のゼンマイを大阪に向けて生産していたことは明らかである。

(1988年10月11日受理)

## 文 献

- 穴澤吉太郎編著(1961): 守門村史, 同村。  
朝日村史編纂委員会編(1980): 朝日村史上巻, 同村。  
千葉徳爾・三枝幸祐(1983): 中部日本白山麓住民の季節の放浪慣行—牛首地区の事例を中心に—, 国立民族学博物館研究報告, 8, 253~306。  
池谷和信(1988): 東北地方の奥地山村におけるゼンマイ生産地域の形成—明治後期から大正における奥地山村の商品経済化の一類型として—, 人文地理, 印刷中。  
石崎直義(1972): 秘境越中五箇山, 北国出版社, 金沢。  
磯部定治(1983): 銀山物語, 新潟日報事業社, 新潟。  
開拓使(1979): 東北諸港報告書, 商品流通史研究編: 近代日本商品流通史資料第1巻, 114~197。  
小寺兼吉(1934): 越中五ヶ山内の梨谷集落の研究, 地理評, 10, 365~394。  
三井田圭右(1974): 東北日本奥地山村におけるゼンマイ生産の実態とその集落維持的意義, 地理評, 47, 370~386。  
中津川村史編纂委員会編(1960): 村史なかつがわ, 新潟県教育委員会(1974): 南蒲・下田村, 大江・大谷, 新潟県文化財年報第13。  
西村徳蔵編(1933): 大阪乾物商誌, 大阪乾物商同業組合, 大阪。  
山北村郷土史研究会編(1965): 山北村郷土史, 同村。  
笹川臨風・足立勇(1935): 近世日本食物史, 雄山閣。  
下田村史編纂委員会(1971): 下田村史, 同村。  
只見町史編纂起草委員会編(1964): 嘉永5年御用帳, 只見町郷土史資料, 3。  
高田善太郎(1981): 江戸時代における五ヶ山の産物資料, 山村研究年報, 2, 65~74。  
高野史男(1979): 日本海沿海地域考—地理的事象の本質について—, 地域研究, 20, 1~10。  
栃尾市編纂委員会(1977): 栃尾市上巻, 同市。  
渡部政吉(1981): 会津田子倉の歴史(上), 会津田子倉の歴史出版会, 只見。

## Zenmai Production from Edo Era to the Early Meiji Era

Kazunobu IKEYA